

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520791

研究課題名(和文) 満洲語数学・医学・思想文献の研究

研究課題名(英文) Manchu books on science, Western religion and Confucianism

研究代表者

渡邊 純成 (Watanabe, Junsei)

東京学芸大学・教育学部・助教

研究者番号：10262221

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：満洲語は、順治年間と乾隆年間後半に大きく変化したことが知られている。本研究では、その中間の時期に清朝政府が翻訳した満洲語儒教書を大量に分析して、康熙年間前半に一般語彙・語法が着実に変化したことを、定量的に解明した。解明済みの儒教語彙の変化と合わせると、資料の成立年代や作成者を客観的に考察できる。満洲語カトリック書の語彙・語法をこれらの儒教書のものと同様に比較して、満洲語の構文や文体に関する当時の西欧人の理解には少なからぬ問題があったことを発見した。問題点の現れ方を、康熙帝が編纂させた満洲語西欧科学書で検討することで、旗人の貢献度が数学書では低く医学書では高いことも、確認した。

研究成果の概要(英文)：It is well known that the Manchu language underwent remarkable changes in the Shun-zhi era and in the second half of the Qian-long era. In this research we investigated the state of that language in the period between these two eras. We first converted 8MB-sized Manchu text in the books on Confucianism translated by the Qing government into an electronic form. Analyzing it from statistical viewpoints, we found that the vocabulary and the grammar of Manchu had changed slowly but steadily in the first half of the Kang-xi era, and obtained numerical indices of the changes. We next compared the vocabulary and the grammar of Manchu books on Catholicism with those of Manchu books on Confucianism. We found that European missionaries had misunderstood several points of syntax and vocabulary of literary Manchu. Observing how these misunderstandings appear in the Manchu books on Western science, we were able to estimate the extent of the contributions done by bannermen.

研究分野：東アジア科学史

キーワード：西学東漸 満洲語文献 満洲語言語学 数学史 儒教思想史 清朝史 医学史

1. 研究開始当初の背景

本研究は、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究(平成17～22年度)「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」(通称「にんぷろ」)の「近世東アジア海域に於ける数学の交流と展開」研究班(通称「数学班」)の研究内容の一つであった。満洲語西欧科学文献の研究の言語学的・古典学的な側面を引き継ぎ、発展させたものである。「にんぷろ」終了時の結果については、その最終年度に提出された成果報告書を参照されたい。ここでは、そのとき不足していた点に焦点を当てる。「にんぷろ」数学班のときに課題となっていたのは、収集した満洲語西欧科学文献を精確に解読することであった。ところで、満洲語を媒介とした西欧科学の伝達/受容の当事者は、西欧人宣教師と、康熙帝および旗人官僚である。したがって、満洲語西欧科学文献を言語学的に適切に解読し、さらにその思想的文脈を把握するためには、両当事者の遺した科学書以外の文献も検討して、必要な情報を収集しておかなければならない。ところが、規範的な満洲語についても旗人知識層の思想史についても最も重要な資料である満洲語官修儒教系書籍は、言語学的な観点、政治史的な観点、そして儒教思想史の観点からも、研究の空白地帯が広く残っていた。また、満洲語カトリック書については、欧米人研究者を中心としてキリスト教布教史の観点から研究がなされてきたものの、言語学的に綿密に研究され、西欧人宣教師の満洲語の特徴が把握されたとはいえなかった。「にんぷろ」数学班では、満洲語官修儒教系書籍の研究にも着手し、儒教用語の変遷のアウトラインを描いたが、言語の統計学的な分析が、数学班を構成する数学専門家の満足する水準でなされるまでには、至らなかった。カトリック書については未着手であった。数学班における人的資源の制約から、他研究者の新規参入を期待していたが、満洲学専門家の絶対数が極めて少ないことがわざわざいってか、新規参入は起こらなかった。本研究の開始時点では、研究上のこれらの空白を早急に埋めなければならない状況にあった。

2. 研究の目的

研究代表者による一連の研究の第一の目的は、満洲語西欧科学書から、可能な限り多くの情報を引き出すことである。内容の大意は、満洲語西欧科学書が作成される際に参照された西欧語または漢語の資料を探し当てればわかるので、ここでは、満洲語西欧科学書の中で用いられた満洲語の言語学的な特徴から、編纂作業の関係者や作業過程に関して詳細な情報を得ることが、中心となる。従来この種の対象に関する研究では、清朝や宣教師団の残した歴史記録を分析していたが、

テキストに密着した言語学的なアプローチを取ることで、歴史記録の信憑性を検証することが原理的に可能になる。第二の目的は、満洲語科学書を現代語に適切に訳すために必要な、当時の満洲語の語彙と文法に関する詳細な知識を得ることである。第三の目的は、満洲語官修儒教系書籍を東アジア儒教思想史の中に位置づけることである。これらの書籍は、言語学の観点からみて、当時の規範的な満洲語の内実を理解するうえで不可欠の資料であるが、東アジア儒教思想史の観点からみても、清朝の支配層であった満洲旗人官僚の儒教理解の水準を直接的に反映している点で、極めて興味深い対象である。後者について具体的には、満洲語への翻訳の在り方とその水準を、日本語など他の非漢語への翻訳と比較して考察すること、経学や朱子学上の論点について満洲語訳がどのような立場を取っているかを解明することが課題である。そのためにも、当時の満洲語の語彙と文法に関する理解の水準を、清朝考証学における漢語文言文への理解の水準まで引き上げることが必要であり、まずそこに重点を置いて研究しなければならない。本研究の目的は、以上の中期的な目的を達成するために、必要な資料を整え、可能な範囲で具体的な課題に着手し、解明してゆくことにある。

3. 研究の方法

(1)本研究では、おもに、言語学的アプローチを採用した。具体的には、用例を大量に集積して、統計学的に適切な方法で分析することである。資料を効率的に処理するためには、まず、電子テキスト化する必要がある。満洲語言語学の現状から、品詞分類を施した本格的なコーパスではなく、満洲語原文をローマ字に転写しただけのテキストファイルを、分析素材とした。分析する事項としては、早田輝洋氏や研究代表者のこれまでの研究で生じた疑問点(品詞分類を含む)、論理表現の詳細など科学書/思想書を解読するうえで問題となる事項、資料を電子入力する際に発見した言語現象に関する事項などを、適宜、検討課題として設定した。それらの事項について、用例を収集したあとで統計学的に処理し、ついで、処理後のデータの言語学的/文献学的/歴史学的な意味を検討した。

(2)本研究では数理言語学の既存の手法にこだわらずに、さまざまな数学的手法を用いた。ただ、本研究の目的は、具体的な言語資料を解明することにあつて、数理言語学固有の主題を探求することにはないので、数学的手法自体を一般的に発展させることは行なわなかった。

4. 研究成果

(1) 満洲語テキストの電子化

本研究では、以下の満洲語テキストの電子化を行なった。儒教系書籍では、『洪武要訓』全巻、『御製人臣傲心録』全文、『満文孔子家語』東洋文庫本巻1・4、『満文日講四書解義』巻4～6・12、『満文日講書経解義』全巻、『満文日講易経解義』全巻、『満文古文淵鑑』巻22・43～64、『満文庭訓格言』全文である。カトリック書籍では、『満文天主実義』Gallica本全巻、『満文万物真源』BNF本全文（以下、フランス国立図書館をBNFと略記する）、『満文天神会課』BNF本全文、『満文聖体要理』BNF本全文、『満文盛世芻蕘』BNF本全巻、『満文性理真詮提綱』全巻などである。道教系書籍では、『満文太上感應篇』BNF本全巻である。医学書籍では、『満文王叔和脈訣』北京故宫本全巻、『満文傷寒活人指掌』BNF本全文、『満文薬性賦』BNF本全文、『西洋薬書』北京故宫本全文である。官修儒教系書籍の電子テキストは、既に電子入力済みの康熙『満文大学衍義』巻1～22、『満文日講四書解義』巻1～3、『満文性理精義』巻1～4・6～10、『満文孝経合解』全文と併せると、テキストファイルで8MB以上の大きさに達した。

研究者の新規参入を促進するために、科研費報告書の形態でテキストを配布した。『洪武要訓』について、東洋文庫所蔵本とBNF本を比較して作成した校訂本を、2012年度に印刷し配布した。『満文天主実義』サンクトペテルブルク東洋写本研究本、『満文天神会課』、『満文聖体要理』、『満文盛世芻蕘』など満洲語カトリック書6種の校訂本を、2014年度に印刷し配布した。

(2) 官修儒教系書籍の言語学

漢字音の満洲文字表記の順治～乾隆年間における変化を解明した。『満文三国志演義』について早田輝洋氏が作成した電子テキストと、本研究代表者が以前の研究及び本研究において作成した満洲語官修儒教系書籍の電子テキストとを併せて、漢字音の満洲文字表記を調べたところ、順治7年～12年に含まれるある時点、具体的な書籍でいえば『満文三国志演義』と『御製人臣傲心録』とのあいだで変化したことが、確定した。おもな変化は、現代漢語共通語では口蓋化が終了した音や反り舌音となっている音の満洲文字表記にみられる。前者の変化は、口蓋化とは逆行している。後者の変化は、漢字「中」の字音の満洲文字表記に典型的にみられる。それぞれの表記法には漢語の特定の変種の具体的な音韻体系が背景にあって、表記の変化は準拠する漢語方言が変更されたことによって生じたものと結論された。ドルゴンの死去や順治帝の親政開始とほぼ同時に起きた変化であるので、順治帝の対漢人政策が背景にある可能性が考えられる。

順治～康熙年間前半における文法事項複

数の変化を追跡した。たとえば、(a)動詞否定形の条件法で、-rakaci、-rakuociの2つの形態のうちのいずれが現れるか、(b)開音節終わりの形容詞が名詞化される際に、名詞化接辞-nggeと形式名詞ninggeのいずれが現れるか、(c)「……するすべての」「……したすべての」という意味を表す際に、動詞連体形に全称接辞-leが後続するか、分離した語eleが後続するか、の3つの点について、本研究代表者が以前の研究及び本研究において作成した満洲語官修儒教系書籍の電子テキストを定量的に分析したところ、統計的に有意な通時的変化が検出された。(a)、(b)、(c)の3つの変化は、変化の速度こそ異なるけれども、『満文古文淵鑑』がひとつの画期となっている点では共通する。また、総合的な表現が分析的な表現で置き換えられた点も、共通する。清朝入関後に満洲人のあいだで生じた言語変化が、数十年後に中央政府の翻訳担当部局で表面化したものと推測される。

順治～康熙年間前半における一般語彙の変化を追跡した。たとえば、指示副詞ereniの出現状況について、本研究代表者が以前の研究及び本研究において作成した満洲語官修儒教系書籍の電子テキストを検討したところ、康熙初年に出現し、『満文古文淵鑑』になると、格調高い書き言葉に特徴的な単語として、頻繁に用いられるようになったことが、定量的に明らかとなった。『満文古文淵鑑』でereniの使用が目立って増えていることは、先に述べた文法事項の変化でも『満文古文淵鑑』がひとつの画期であったことと同様である。文法事項の変化と共通する、一般的な原因に基づく現象であるとの推測が、この事実によって強化される。他の複数の単語や語句の出現状況についても、本研究では官修儒教系書籍を素材として、早田輝洋氏による先行研究よりも時間的な幅は狭いが分解能を上げて、複数の単語や語句の使用状況の変化を、定量的に追跡した。得られた結果は、儒教系書籍やそれらに近いジャンルの書籍の成立年代を推定する際に、利用できる。カトリック書籍に対する本研究での応用結果を後述する。

研究代表者の以前の研究を継続して、順治～康熙年間における儒教用語の変遷を考察した。ほとんどの儒教用語については、『満文日講解義』シリーズでほぼ確立されたものが、乾隆年間中葉以降の『繙訳四書五経』シリーズで大幅に改変された、とまとめることができるが、康熙年間において例外的に不安定であった儒教用語、たとえば朱子学用語「動静」の「静」の訳語の分析が、課題として残されていた。本研究では、この訳語の不安定さが、一般語彙の不安定さに基づくものであったことが、みいだされた。順治初年には、無音の状態と弛緩して動かない状態は、ともにekisakaで表わされていたようである。「静」を表わす他の単語cib se-が、順治末年か康熙初年に発生した。しかし、ekisaka

と cib se-のいずれで無音の状態を表示し、いずれで弛緩して動かない状態を表示するかは、なかなか定まらなかった。『滿文日講四書解義』、『滿文日講易經解義』、『滿文古文淵鑑』、『繙訳易經』などでの ekisaka と cib se-の使い分けの状況を綿密に追跡すると、「動靜」の「靜」の訳語が不安定であったことは、単語の意味が時間的に不安定であったというよりも、むしろ、2種類の使い分けが長期間にわたって併存しており、書籍に用例として残る際のサンプリングが不安定であったことの結果であった、とみるべきである。

(3) 滿洲語官修儒教書に現れた經学・朱子学への理解度

現在の滿洲語言語学は、思想書の翻訳の良否を綿密に分析できる水準には達していないので、本研究ではいくつかの初等的な観察を行なうに留まった。以下では、(a)經書理解と(b)朱子学理解の各々にに関してひとつずつ、得られた結果について述べる。

(a)漢文『日講解義』シリーズは、基本的に朱子学の観点に立った經書解説なので、『滿文日講解義』シリーズにおける滿洲語訳も朱子学派の訓詁に基づいて行なわれている。しかし、經書全文の翻訳なので、注釈されない箇所についても何らかの解釈を与える必要があった。朱子学派が注釈しなかった箇所では、『五經正義』を参照したらしい形跡がある。たとえば、『易經』萃卦や渙卦の卦辞の一節「王假有廟」について、『滿文日講易經解義』の複数箇所では、「有廟」が bisire miyoo と直訳された。『伊川易伝』や『周易本義』にこのような解釈の明文はみえないが、『周易正義』の当該箇所には、この「有」を存在/所有の動詞として読者に解釈させそうな一節がある。苦し紛れに訳した結果が偶然に一致した可能性もあるが、いっぽう『滿文古文淵鑑』巻43・張方平・屯田疏の訳文では、『漢書』に典故があることを探り当てて顔師古注を参照しながら翻訳しているので、經書や前四史などの古典について唐代の注釈まで参照して訳していた可能性は高い。

(b)近年、木下鉄矢氏が『大学』の「格物」の「物」について、朱熹『大学章句』にみえる訓詁「物、猶事也」に基づいて、物体を意味するのではない、と論じている。滿洲語儒教書の訳文を検討すると、氏の議論を支持する結果が得られた。『大学衍義』巻5・格物致知之要一・明道術・天理人心之善における『詩經』烝民「天生烝民、有物有則」への真徳秀の案語「事、亦物也」を、康熙『滿文大學衍義』はそのまま滿洲語に訳している。また、『大学』「物有本末、事有終始」に対する漢文『日講四書解義』の解義「有名象之可指者、皆謂之物」を、『滿文日講四書解義』はそのまま滿洲語に訳している。「格物」の「物」と「物有本末」の「物」が厳密に一致するか否かについては、いろいろ議論のあるところであるが、現代日本語での「物体」と「こと」

とのように、存在論において懸け離れた対象をそれぞれ指しているのではないことは、いえるであろう。康熙『滿文大學衍義』や『滿文日講四書解義』では、訳文全体を読めば、『大学』の「物」が物体を意味するのではないことが読者にわかるように翻訳されていたことが、わかる。また、『滿漢字合璧四書集註』は、漢文部分における經書本文の欠画の状況と滿洲語部分における經書本文の訳文とから、『滿文日講四書解義』刊行後の康熙年間に成立したと考えられるが、『孟子』告子上の「孟子曰：富歳子弟多頼……故理義之悦我心、猶芻豢之悦我口」に対する朱熹の注「程子曰：「在物爲理、處物爲義、體用之謂也。……」」を訳す際に、「物」を、ふつつ「こと」を意味する滿洲語名詞 baita で訳している。訳者が、あるいは胡渭『大学翼真』巻4にみえるような清代漢人による議論を参照したのかも知れないが、木下氏と同じ理解をもっていたことがわかる。

(4)文字の獄の例外としての官修滿洲語書籍
華夷思想に関連する漢文の文章が、文字の獄が盛行する中で、語句を改竄されたり破棄されたりしたことは、清代中国の文化史においてよく知られた事実である。ところで官修の滿洲語儒教系書籍では、改竄される前のテキストの忠実な滿洲語訳が、そのまま保存されている。本研究では、そのような例を複数収集した。康熙『滿文大學衍義』巻20・格物致知之要二・辨人材・儉邪罔上之情の末尾の真徳秀の案語や、『滿文古文淵鑑』巻45・歐陽修・論杜衍范仲淹等罷政事状、同巻57・王十朋・上殿劄子の中の語句が、その例である。このような事例は、刊本が実際に印刷された年代の決定という書誌学的観点、文字の獄の実際の運用状況の解明という政治史的観点の両者に関して、興味深い結果である。

(5) カトリック書籍の言語学と文献学

カトリック書籍の滿洲語の特徴を、官修儒教系書籍と比較して抽出した。(a)端的な誤用と(b)不適切な使用とについて述べる。

(a)官修儒教系書籍でも白話小説でも稀な用法が、カトリック書籍で観察された。研究代表者がこれまでに作成した滿洲語の官修儒教系書籍、道教系書籍、医学書籍の電子テキストでは、「NP1 は NP2 である」という意味を表すとされる滿洲語のセンテンス「NP1 NP2 inu.」が、知覚/認識を表わす動詞の、知覚/認識の内容を表わす目的語である補文節になるときは、文末の inu が、ほとんどのばあいに除去されてから補文節になる。削除されないのは、waka で終わるセンテンスと対句になって「NP1 NP2 inu, NP3 NP4 waka.」のかたちを取るばあいを除けば、『滿文古文淵鑑』巻57・楊万里・論神威疏の2例のみである。また、滿洲語のセンテンス「NP1 NP2 inu.」が、名詞を連体修飾する関係節となるときにも、文末の inu は除去される。inu の

このような挙動は、いくつかの文法書で分類されているようなコピュラではなく、肯定のモダリティを表わす終助詞であると考えるほうが、統語論的に適切であることを強く示唆している。ところで『満文性理真詮提綱』では、満洲語のセンテンス「NP1 NP2 inu.」が、そのまま名詞 ba を連体修飾する関係節となることが少なくない。『満文天主実義』両本と『満文性理真詮提綱』では、知覚/認識を表わす動詞の目的語である補文節になるときに inu が除去されないことが、やはり少なくない。文末の inu の統語論的性質について、『満文性理真詮提綱』の翻訳者 de la Charme や『満文天主実義』の翻訳者は、誤解していたことになる。また、「敢えて」を意味する満洲語副詞句 gelhun akū が、『満文天神会課』、『満文聖体要理』、『満文盛世鄒義』では、直前に疑問詞を伴うか、後に否定形が伴うか、のいずれかのばあいを除けば、副詞句 gelhun -i に置き換えられている。ところで gelhun -i という表現は、早田輝洋氏や研究代表者がこれまでに作成した、西欧人が関与しなかった満洲語書籍の電子テキストにはまったく現れないので、誤用である可能性が極めて高い。なお、『満文天主実義』や『満文性理真詮提綱』では正しく gelhun akū を用いている。以上の2つの事実は、複数の西欧人宣教師が満洲語の構文あるいは語彙を誤解していたことと、誤解の様態がさまざまであったこととを、示している。他にも、『満文天神会課』や『満文聖体要理』では、主題マーカを適切に解釈/運用できなかった形跡がある。終助詞の統語論的挙動にせよ、「主題+陳述」型の構文にせよ、西欧人宣教師の母語であるフランス語などにはない言語現象であるので、ここで述べた誤用は、満洲語を修得する際に母語からの干渉があったものとして説明できる。

(b)官修儒教系書籍では稀であるが、白話小説では稀ではない用法が、カトリック書籍で観察された。康熙年間以降の満洲語では、センテンスの主題を指示代名詞で表わすばあいに、ere が用いられるばあいと ere serengge が用いられるばあいがある。ere serengge は、研究代表者がこれまでに作成した満洲語の官修儒教系書籍、道教系書籍、医学書籍の電子テキストでは、『満文古文淵鑑』巻 52・曾鞏・尚書左右丞制に1例みられるのみである。白話小説では『満文金瓶梅』に約 20 例みられるので、康熙年間の半ばに発生し、格調高い文体では好まれなかった表現であると推測される。ところで ere serengge という表現は『満文万物真原』、『満文天神会課』、『満文聖体要理』、『満文盛世鄒義』、『満文性理真詮』などの満洲語カトリック書籍では、複数の用例がみられる。満洲語カトリック書籍は、儒教書と同等の威信をもった言語表現を採用することに失敗した。また、前項(2)③で述べたように、指示副詞 ereni は、官修儒教系書籍では格調高い文体で頻用される単語で

あり、ひとつの文章の中では ere serengge と共存しないのであるが、カトリック書籍『満文盛世鄒義』、『満文性理真詮提綱』で ere serengge と共存している。『満文性理真詮提綱』の翻訳者 de la Charme は、経書を引用する際に官修儒教系書籍を丹念に参照する学力を有していたが、文体に相応しい語彙を選択する能力には問題があったと考えられる。西欧人宣教師の満洲語能力の以上のような実態は、もちろん、清朝側に知られていたことであろう。

『満文天主実義』の成立過程も、本研究で推定することができた。『満文天主実義』のサンクトペテルブルク東洋写本研究本と Gallica 本は、すでに満洲語題名からして異なっているが、内容を詳細に検討して、以下の結果を得た。サンクトペテルブルク東洋写本研究本が Gallica 本に先行して作成された。サンクトペテルブルク東洋写本研究本の儒教用語や一般語彙を、官修儒教系書籍のそれらと比較すると、『満文日講解義』シリーズよりも古い特徴がみられる。引用される『書経』などの経書の訳文も、『満文日講解義』シリーズでの訳文を参照したとは思われないほどに、懸け離れている。カトリックの教義に関わる書籍であることと、満洲語を用いていることから、宮廷に近いカトリック宣教師が翻訳した可能性が高いので、成立年代の下限が『満文日講易経解義』よりも遅れることはないであろう。順治年間半ばから康熙初年に成立したものと推定される。翻訳に際して利用された漢文本が康熙帝の御名を避けた形跡があるので、成立年代は康熙初年まで絞り込まれる。Gallica 本は、ペテルブルク東洋写本研究本を部分的に改変して作成された。康熙年間後半に成立したものと推定される。改変者は少なくとも2人存在した。漢文『天主実義』を読んだ人物とほとんど読んでいない人物、朱子学の素養がまったくない人物とカトリック教義の素養が乏しい人物である。「漢文『天主実義』を読み、かつ、朱子学の素養がまったくない人物」は、西欧人宣教師であろう。「漢文『天主実義』をほとんど読まず、かつ、カトリック教義の素養が乏しい人物」は、そのような人物による改変を受け入れてしまったことも考慮すれば、康熙帝であった可能性が考えられる。なお、『満文天神会課』や『満文聖体要理』などについても、神学用語に関するカトリック書籍間の相互関係を分析し、また、官修儒教系書籍の語彙・文法の通時的变化について本研究で得られた結果を適用することで、『満文天主実義』サンクトペテルブルク東洋写本研究本よりも遅く、康熙年間後半に成立したらしいと、推定できた。

(6)満洲語西欧科学書の言語学

前項(5)において抽出したカトリック書籍の言語の特徴の、満洲語西欧科学書における出現状況を検討した。結果を、数学と医学とに

分けて、以下に述べる。

数学書籍について。精写本である『満文算法原本』東洋文庫本では、(5)①で述べた、文末の inu が関係節の中で残存する例は、存在しない。知覚／認識を表わす動詞の目的語である補文節になるときに inu が削除されない例は、2 例ある。西欧の言語の影響が数学用語や全称の処理法など複数箇所に見られ、乱雑な筆跡で書かれた草稿である『満文算法纂要総綱』BNF 本の前半では、文末の inu が関係節の中で残存する例は存在しないものの、知覚／認識を表わす動詞の目的語である補文節になるときに inu が除去されない例は、10 例ある。満洲語西欧数学書の満洲語には、カトリック書籍ほどひどい破格はないけれども、官修儒教系書籍の満洲語から外れる語法が存在することが判明した。康熙帝の校閲を受けていない『満文算法纂要総綱』の草稿のほうが、外れ方が大きい。

医学書籍について。『格体全録』の諸本には、終助詞 inu の誤用ないしは不適切な使用は、みられない。『格体全録』を編訳した宣教師 Parrenin は、旗人官僚多数が協力者として配属されたことと康熙帝による綿密な校閲を受けたこととを、西欧人宛の書簡の中で述べているが、その証言は、『格体全録』の言語学的な特徴によって裏付けられた。

前項(5)と(6)①②から得られる目下の結論を述べる。康熙年間における、西欧人宣教師たちによる西欧科学に関する御前講義は、康熙帝が西欧科学を修得する機会であっただけではなく、清朝が西欧人に満洲語を修得させる機会でもあった。そのように考えると、康熙年間の清朝が宮廷に残留させた西欧人宣教師たちが、Bouvet に典型的にみられるように、比較的低年齢であったことが、合理的に説明される。また、雍正年間に、西欧人宣教師の翻訳業務と科学業務は分離されてゆくが、それは、『格体全録』の編訳を通じて Parrenin に満洲語を修得させたうえで、彼が他の宣教師を訓練する経路を確立したことで、はじめて可能になったものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

渡邊 純成、『満文天主実義』の言語の特徴と成立年代について、水門 言葉と歴史、査読無、25 巻、2013、pp.L107-L156
渡邊 純成、『満文性理精義』にみる満洲語文語の論理表現、満族史研究、査読有、9 号、2011、pp.75-140

〔学会発表〕(計 3 件)

渡邊 純成、清代前半の満洲語書籍にみる西洋の科学と宗教、第 58 回国際東方学者会議東京会議、招待講演、2013 年 5 月

24 日、日本教育会館(東京都)

渡邊 純成、満洲語西洋薬品マニュアル『西洋薬書』について、第 113 回日本医史学会学術大会、2012 年 6 月 16 日、獨協医大(栃木県)

渡邊 純成、満洲語解剖学書『格体全録』について、第 112 回日本医史学会学術大会、2011 年 6 月 11 日、順天堂大(東京都)

〔図書〕(計 4 件)

川原秀城(編)、安大玉、……、渡邊 純成、岩波書店、西学東漸と東アジア、2015、344p。(担当部分 pp.143-175)

中村春作(編)、小島 毅(監修)、市来津由彦、……、渡邊 純成、東京大学出版会、東アジア海域に漕ぎだす 5 訓読から見なおす東アジア、2014、316p。(担当部分 pp.83-98)

静永 健(編)、小島 毅(監修)、板倉聖哲、……、渡邊 純成、東京大学出版会、東アジア海域に漕ぎだす 6 海がはぐくむ日本文化、2014、256p。(担当部分 pp.53-64)

Saraiva, L. (ed.), Antonucci, D., Baldini, U., ..., Watanebe, J., World Scientific, Europe and China: Science and the Arts in the 17th and 18th Centuries, 2013、390p。(担当部分 pp.185-202)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡邊 純成 (WATANABE Junsei)

東京学芸大学・教育学部・助教

研究者番号：1 0 2 6 2 2 2 1